

まとめ

データサイエンスから考える Society 5.0の大学教育



7

7つの視点

「2025年までに50万人育成計画」の発端となった「AI戦略2019」は、「人間中心の社会をつくること」を目的としている。データサイエンスは統計学やAIの知識を教えるだけのものではない。この新しい教育に取り組むことを、大学全体の教育改革につなげよう。

1 Society 5.0における教育のゴールは？

Society 5.0を自学なりに捉えたうえで、その中で自学がどのような役割を果たすのかをまず決める。未来に正解はないが、あまたのデータから客観的に意思決定することが大切だ。

2 高校までの教育とどう接続するか？

すでに初等中等教育では、Society 5.0に向けてのICT教育や探究学習などに取り組みつつある。そのような教育を受けた生徒から選ばれるためにも、教育接続を図りたい。

3 学生の状況はどうか？

データサイエンスはまさに「学修者本位」でこそ、身に付く分野である。「教えたいこと」ありきではなく、自学の学生の状況に合った教育手法、カリキュラムの開発を。

4 学内にあるリソースは何か？

教員、教材不足が2大課題のデータサイエンス。まず学内のリソースを棚卸しし、ないものについては、学外から調達を。それが社会に開かれた大学、教育のきっかけにもなる。

5 最適な教育手法は？

学生が実社会で使えるスキルを身に付けるためには、実践、文理横断、鮮度がポイント。これまでのやり方では対応が難しいことも。一から発想したほうが早道でもある。

6 企業や社会とどう連携するか？

実践力養成には、企業や行政等の実データを使った教育が有効だ。これまでの企業や社会との関係がここで生きる。手薄な場合は、実データも実装した外部リソースを導入する方法もある。

7 リカレント教育にどう生かすか？

学生も社会人も同じスタートラインに立つデータサイエンス。良質なプログラムを開発できれば、リカレント教育での提供も積極的に行える。